

モーツァルト／セレナード第10番 変ロ長調 K.361(K.370a) 「グラン・パルティータ」

セレナードは本来、「夕べの音楽」の意味である。もともとは想いを寄せる女性の家の窓辺で夕暮れに演奏する音楽をさしていた。それが古典派の時代になると楽章の多い管弦楽作品の形式へと発展する。「グラン・パルティータ」の通称で親しまれているモーツァルトのセレナード第10番もその一つ。R. シュトラウスと同じく、「13管楽器のためのセレナード」と呼ばれることも多いが、バセットホルン2本を含む12の管楽器とコントラバスで演奏される。コントラバスの代わりにコントラファゴットを用いることもあるため、こうした呼び方も生まれた。

全部で7楽章からなり、すばやい両端楽章の間にメヌエットが二つ、ロマンスと変奏曲、アダージョの緩徐楽章が一つずつ含まれている。クラリネットが野外音楽風ののびのびとした雰囲気をかもし出したかと思うと、オーボエが悲哀に満ちた楽想を奏で、光と翳をみごとに使い分けるモーツァルトの絶妙な管楽器書法に魅惑される。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。